

## [市民公開講演]

## 日本文学における病

ロバート キャンベル

早稲田大学特命教授

1300年間におよぶ日本文学の全貌を見渡すことは容易ではありません。しかし見渡すのに良い地点は、いくつもあります。有史以来、発生と変異を繰り返し人類とともに進化してきた病原は文学の歴史を振り返るのに有効な視点を与えてくれるに違いありません。

日本には災害や疫病とともに歩んだ長い歴史があります。何より、千年以上前から生きた人々の経験がある。幸いそれらは膨大な記録として残されています。近いところでは、100年、200年前の日本にどんな過酷な状況があったのか、その中で何が人々を勇気付け、支え、あるいはその協働と救済を阻んだのか。そこには、私たちが直面する災厄がピークを越えた後、どのように社会を再生させるかについての知恵も見つかるはずです。

病は、時代やジャンル、作家、主題などを超えたかたちで日本列島の文学にどのような契機を与えたのか。作品の中で、立ち現れる無数の人々の言葉と心の上に、病はどのような影を落としていったのか。ある時代、ある表現の間に、ほのかな光をも照らしているのかもしれない。その兆しは、どこを見れば目で確かめることができるのか。

豊穡にして多様なリソースとして在る日本文学という地平に立ち、様々な観点から歴史社会を振り返ってみたいと思います。

(ロバート キャンベル編著『日本古典と感染症』2021年、KADOKAWA角川ソフィア文庫所収、ロバート キャンベル「感染症で繋げる日本文学の歴史」より)